

1 検体処理における事例とその対処につい
2 て その2-ヘパリンLi採血管によるLDHへの影響-

3
4 ○高橋直樹 砂本留美子 伊藤真澄 柴田義則 (成
5 田赤十字病院検査部)

6
7 **【はじめに】**

8 検体分離上で検査測定値に与える事例として、血漿
9 中の残存血小板がLDHに与える影響について若干の
10 知見を得たので報告する。

11 **【測定装置】**

12 日本電子 BM2250 自動分析装置

13 シスメックス XE-2100 自動血球分析装置

14 **【方法】**

15 ①LDHに対する血小板の影響

16 ヘパリンLi採血管(テルモ、ベクトンの2社)を使用
17 し、遠心条件 3000rpm・7分間と 3000rpm・7分間2回
18 遠心でのLDHと血漿中の血小板を測定した。

19 ②対処法の検討

20 遠心時間をプレーン採血管7分間(対照)とヘパリン
21 Li採血管7分、10分、15分間に設定し、LDHと血漿
22 中の血小板を測定、比較した。

23 **【結果】**

24 ①7分間1回遠心と比較して2回遠心においてLDH
25 と残存血小板の減少が確認された。また、残存血小板数とLDHの測定値において一定の相関性が確認できた。

26
27
28 ②遠心時間の検討において、ヘパリンLi採血管7
29 分間と10分間ではLDHと残存血小板の測定値に差を
30 認めしたが、10分間と15分間では差が認められな
31 かった。また、プレーン採血管とヘパリンLi採血管
32 10分、15分間遠心の測定値に差は確認されなかった。

33 **【考察及びまとめ】**

34 プレーン採血管の場合、血小板は粘着・凝集が起
35 りすみやかに遠心分離されるが、ヘパリンLi採血管
36 の場合、遠心分離を適切に行わないと血漿中に血小板
37 が残存し、LDHの測定値に影響することを確認し
38 した。対処法としては、遠心時間を10分間にすること
39 で血小板の影響を回避できた。0476-22-2311(2280)